

平成 14 年度 学術研究助成報告

ポーランドの中世・ルネサンス期における宗教音楽の研究

黒坂 俊昭

ポーランドは中欧に位置しながら、国民の大多数がキリスト教に帰依しているカトリック教国である。この国にあって、生活、文化、社会、芸術などにおいてキリスト教の存在が絶大であることは言うまでもない。キリスト教は、中世初期より礼拝や布教にあたって音楽をたいへん重要視してきたが、ポーランドでも 10 世紀にキリスト教が国教に制定された頃から、教会で活発に音楽活動が展開されるようになった。この教会で作られ歌われた音楽は、ポーランドの中世・ルネサンス音楽を先導し、さらにポーランド文化に計り知れない影響を及ぼした。他方、そのポーランドの教会音楽は、西欧の標準的なキリスト教音楽とは異なった性格を有している。しかし現在、西洋音楽史が語られる時、このポーランド音楽に固有の特徴について触れられることは全くない。以上のことから、ポーランドの中世・ルネサンス期のキリスト教音楽を調査・研究し、ポーランド音楽の理解と共に、それを西洋音楽史の再構築に向ける研究を始めるに到った。

言うまでもなく、ポーランドの中世・ルネサンス音楽の研究はポーランド国内が最も進んでいる。そのためポーランド音楽の権威であるヴェンツォフスキ博士からの助言を得、現在、文献の講読に努めている。中世とルネサンス期の宗教音楽に限定して研究を進めているが、ショパンの音楽をはじめとし、ロマン派の様々な芸術音楽にもその影響が色濃く見られ、本研究から派生した成果が得られている。欧米や日本ではまだあまり知られるところではないが、ポーランドの中世・ルネサンス期における宗教音楽は非常に豊かで多彩である。目下のところ、この音楽の全体像を理解し、西洋音楽の歴史にそれを位置付けようと試みている。

『古今集通詁』と富士谷御杖

山本 和明

「富士谷学派の古典注釈研究」というテーマを掲げ、近世後期国学者の一系統である富士谷学派（北辺学派）の古典注釈の方法に関して考察を加えることにした。本学着任以来、所蔵する貴重文献を広く学界に紹介することも、相愛に勤めるものの果たす役割、と考えてのことである。

本学貴重資料室には、田中重太郎先生旧蔵『古今集詁』、さらに近年収蔵された『訳古今集』という二写本がある。これらは、対象となる富士谷御杖の著したもので、『古今和歌集』を素材に里言訳を加えている。従来、本書の存在は一部の研究者にしか知られておらず、古今集注釈史の上からも見逃されていた。今般、学術研究助成を得、香川景樹の桂門派との関わりや、本居宣長の『古今集遠鏡』などとの繋がり・相違などについて検証を重ねることができた。

御杖については「百人一首注釈書叢刊『百人一首燈』」（1996年・和泉書院、本学鈴木徳男教授との共著）、「御杖自筆『歌道挙要』について」（1998年・「相愛国文」第11号）など、既に考察の土台となる研究を進めてきたが、こうした成果を踏まえ「古典注釈の方法」に関して、ある程度の結論を得ることができたと思う。

その研究成果は、2003年2月に和泉書院より刊行された藤岡忠美先生喜寿記念論文集刊行会編『古代中世和歌文学の研究』に『『古今集通詁』について・続貂』という題にて、既に拙稿を発表している。発表後、和歌研究者からもお手紙をいただき、貴重なご意見を頂戴することもあった。論中述べていることではあるが、今後、本書の出版なども検討をしていきたいし、また本研究の過程で得た様々な資料をもとに、周辺学派との関わりについても継続して研究を行っていききたいと思う。

平成 14 年度 演奏会助成報告

チェロリサイタル

斎藤 達男

- 演奏会タイトル 「斎藤建寛リサイタルシリーズ Vol. 4」
- 研究の主旨 チェロ奏法の研究
- 日 時 2002 年 5 月 27 日（火） 午後 7 時開演
- 場 所 ザ・フェニックスホール
- マネジメント 大阪アーティスト協会

チェロ音楽の最も重要なレパートリーである「無伴奏チェロ組曲全 6 曲」を第 1 番から順に 1 曲ずつ織り込み、他の楽曲と合わせて一晩のプログラムを組み立て、全 6 回のリサイタルシリーズを開催することを思い立った経緯は研究論集第 19 巻で述べたとおりである。2000 年 12 月に第 1 回をスタートさせ、以来半年に 1 回のペースで行なってきた。この度の助成の対象となったのは第 4 回のリサイタルである。シリーズ全 6 回はそれぞれの回に私が求めようとする楽曲研究のコンセプトに従ってプログラムを組み立てているが、第 4 回ではフランス印象派の音楽を特集した。合わせてバッハの「無伴奏チェロ組曲第 4 番 変ホ長調 BWV 1010」とによる、あまり類例を見ないプログラムである。内容は下記のとおりである。

- 1) C. ドビュッシー：チェロ・ソナタ
- 2) J. S. バッハ：無伴奏チェロ組曲第 4 番 変ホ長調 BWV 1010
(休 憩)
- 3) O. メシアン：「イエズスの永遠性への讃歌」
- 4) F. プーランク：チェロ・ソナタ

20代の頃、私は近現代のフランス音楽に魅せられ、盛んに学びまた演奏した。自由な感性、ドラマ性、音色の変化、音楽の光と影、どれをとってもドイツ音楽とはまた異なる世界が展開する。また同じフランス音楽の中でも作曲家によりその音楽は千変万化の個性を発散する。しかし大した理由はないが10数年それらの作品群と疎遠になっていた。演奏の機会にあまり恵まれなかったために自然に遠ざかっていたようであるが、フランス音楽は依然として私の胸の奥にあり、このシリーズを機会に再び研究をし直して新たな発見を試みようと考えた。

今回のプログラムに上げたドビュッシー、プーランク、メシアン作品も甚だしく異質の個性に彩られている。彼らの作品を演奏する上で私が強く求めてやまなかったものは、音楽の表現もさることながらそれぞれの作品の音色感の違いである。微妙な音色の変化を模索する運指法、運弓法は技術的なところにとどまらず、感性の領域にまで及ぶ。ドイツ音楽、イタリア音楽、ロシア音楽とも同じくしない独自の奏法テクニックが要求されると感じている。チェロ奏法の研究においては意義のある課題だと思っている。またバッハについては第4回ゆえに「無伴奏チェロ組曲第4番 変ホ長調 BWV 1010」を演奏した。バッハも全6曲中、後半（第4番以降）に入ると格段に作品の規模が大きくなり難易度が高くなる。第4番は変ホ長調という調性により、開放弦が効果的に使えず、そのために響きも悪く指も酷使する難曲である。前記のフランス音楽3曲と合わせると、力量的にかなり苛酷なプログラミングとなり、全6回の中でも試練とも言える第4回である。しかし改めて感じることはバッハの作品の懐の深さである。他のどのような作品と合わせても、彼の音楽の本質は少しも損なわれることなく、また他の音楽をはねつけることもない。どのような状況に置かれても悠々と他と融和しながら自らの存在を毅然と主張し続ける音楽である。バッハの偉大さを再認識するこの度の第4回となった。

ヴァイオリン演奏法の研究

田辺 良子

タイトル 田辺良子 ヴァイオリン・リサイタル

日時 2002年5月1日(水)

場所 イシハラホール

長い間自主公演リサイタルの開催を考えながらチケット販売のわずらわしさに気をそがれていたが、自分の研究発表と学生達に少しでも刺激、そして励みになるのならばと本公演の開催を決断した。ピアノは本学助教授の小坂圭太氏にお願いし、曲目は以下の通りである。

タルティーニ ソナタ ト短調「悪魔のトリル」

ブラームス ソナタ 1 番 ト長調「雨の歌」 op. 78

バッハ 無伴奏ソナタ 2 番 イ短調 BWV 1003

ラヴェル ソナタ

4 曲ともソナタであるが、すべて違った性格のもので、作曲された国も年代も異なる。タルティーニ (1692-1770) の「悪魔のトリル」はソナタといってもショープースに近く、2 曲目のブラームス (1833-1897) の様ないわゆる二重奏ソナタとは異なり、3 曲目のバッハ (1685-1750) は無伴奏で、バロック時代の典型的な教会ソナタ、4 曲目はフランス印象派の代表、ラヴェル (1875-1937) の作品である。限られた紙面ですべてを説明するのは至難の業だが、タルティーニではヴァイオリン技巧を、ブラームスでは豊かな音色とピアノとの対話などの室内楽的な要素を、バッハでは当時の建築によく似た曲の構成と重音奏法によるポリフォニーの表現を、ラヴェルではお互いが独立性の高いラインを貫徹しながらも一緒に一つのものを築く工夫、又ブルースのノスタルジックな雰囲気などこの曲特有のユニークなキャラクターをいかに魅力的に表現するかをそれぞれ研究する際の軸とした。リサイタルを終えて感じる事は、今後さら

に1曲でも多くの作品に取り組み、ヴァイオリンレパートリーの一層の探求をめざしたいという事である。しかし、このような研究は授業や雑務の合間に断続的に成し得るものではなく、一定以上のまとまった時間を必要不可欠とする。本学にもサバティカル制度が一日も早く導入される事を願うのは私だけであらうか。

オペラの研究

——モーツァルト「コジ・ファン・トゥッテ」役柄——アルフォンゾ

山田 健司

タイトル：関西二期会第56回オペラ公演

モーツァルト作曲「コジ・ファン・トゥッテ」

日時：2002年5月26日（日）14:00～

場所：アルカイクホール

スタッフ：指揮＝金聖響

演出＝鈴木敬介

オーケストラ＝京都市交響楽団

関西二期会主催「コジ・ファン・トゥッテ」のアルフォンゾ役は今回で3回目である。前2回は訳詞上演であった。今回は初原語上演ということでは是非挑戦してみたいと出演した次第である。これまでの指揮者は、第1回が小泉和裕氏、第2回が田中良和氏そして今回は新進気鋭の金聖響氏ということでこれも又、楽しみの1つであった。

演出は、3回ともモーツァルトでは定評のある鈴木 敬介氏で、訳詞と原語の違いがどのように舞台に反映するか興味深かった。

一番苦労したのは、やはりイタリア語のレチタティーヴォでなにしろ、しゃべりまくる練習の積み重ねしかなかった。結果的には、満足の出来る結果であったと思う。

最後に、この公演に対する日下部 吉彦氏の音楽雑誌「音楽の友」での批評を掲載することとする。

《第 56 回オペラ公演「コジ・ファン・トゥッテ」新聞・雑誌批評》

「音楽の友」7月号 CONCERT REVIEWS より

ダブルキャストの B 組、フィオルディリージ役の村井幹子が、体調不調のため、急拠、尾崎比佐子が代って出演。その尾崎が、見事な演唱を披露した。わずか数回の合わせだったというのが、全く危なげなく、完璧に近い出来だった。主役のピンチ・ヒッターが即座に調達できるまでに、関西のオペラ界の層が厚くなったとみることもできる。

その尾崎が児玉祐子（ドラベッラ）のコンビが絶妙で、声のアンサンブルのよさが、今回の公演全体の成功を担ったといってもいい。もう一方のコンビ、坂口尚平（フェランド）と川下登（グリエルモ）のアンサンブルも演技も、なかなかのものだったが、アリアの部分で、坂口の声にやや不満が残った。山田健司（アルフォンゾ）は、さすがにベテランの味でドラマ全体をひきしめていた。小倉篤子（デスビーナ）のキャラクターと演技もよかったが、やはり、アリアとなると一層の声量が望まれる。金聖響指揮の京都市響は、快適なモーツァルトを聴かせてくれたが、歌手陣との合わせが足りなかったのか、テンポ感のズレが少しあった。鈴木敬介の演出は、いつもながら、自然な音楽の流れを作っていた。5月26日・尼崎アルカイクホール

（日下部吉彦）

平成 14 年度 研究成果刊行助成報告

『学校改革のゆくえ——教育行政と学校経営の現状・改革・課題——』

小松 茂久

2002 年 4 月に昭和堂より刊行するに際して、本制度を活用させていただいた。学校改革が急転直下で進行しており、ともすれば改革の追隨に終始してしまう現状を憂い、現代の学校改革を俯瞰する意図をもって本書を執筆した。教育行政ならびに学校経営の基本構造と最新の教育改革・学校改革の情報を可能な限り含めるとともに、私学行政について一章を当てることで、類書にはない特色を出すことができた。幸いにも、本書は宇都宮大学、西南学院大学で教職専門科目の授業用テキストとして採用されるなど、評価を得ている。

『明暗評釈 第一巻 第 1 章～第 44 章』の出版

鳥井 正晴

2002 年度予算に計上して頂いた相愛学園出版助成により、2003 年 3 月、和泉書院から『明暗評釈 第一巻』を刊行した。本書は、漱石作品の中でも、最大の長編であり、最後の作品であり、また内容的にも最も難関とされている『明暗』に、章ごとに「評釈」を加えたものである。

日本近代文学の研究は、漱石の研究（研究方法）が、10 年、先を引っ張るのが恒例であるが、その漱石の研究においても、いわんや『明暗』の「評釈」は、本邦初公開の試みである。『明暗』論、6、7 百本（？）とも推測される、その漱石研究 50 年の総体と対峙した、大なる目論みの、その第一巻である。